

日本におけるフィヒテ自然哲学研究

KIMURA, Hiroshi / 木村, 博

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

112

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

16

(発行年 / Year)

2000-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004920>

日本におけるフィヒテ自然哲学研究

木 村 博

はじめに

日本における最近のフィヒテ研究は、たしかに、着実な拡がりや深まりを示している。阿部典子編「日本語で読めるフィヒテ関係文献」(『自我概念の新展開』所収、講座ドイツ観念論、第三巻、1990年)を概観するならば、フィヒテ研究のそうした拡がりや一端をうかがい知ることができる。これに加えて、ドイツに先駆けて設立されたフィヒテ学会である「日本フィヒテ協会」による機関誌『フィヒテ研究』の創刊(1993年)もまた、フィヒテ研究のいっそうの深化を推進しているといえるであろう。(なお、上記『フィヒテ研究』第6号には、中川明才編「日本フィヒテ協会会員・業績一覧(1989-97年)」が掲載されているので、これも参照のこと。)

けれども、このような旺盛なフィヒテ研究にもかかわらず、「フィヒテ自然哲学研究」というテーマに限定していえば、依然として空白に近い状況にあるといわざるをえない。その点で、日本におけるフィヒテ自然哲学研究のもっとも顕著な動向は、やや逆説的ながら、①フィヒテ自然哲学の軽視ないしは無視の傾向なのである。そのうえで、つぎに、②フィヒテ自然哲学にたいして否定的に解釈する傾向を指摘することができる。そして、さいごに、きわめて少数ではあるが、③フィヒテ自然哲学にたいして肯定的、あるいはより積極的に解釈する傾向が続く。むしろ、①の軽視ないしは無視の傾向は理由のないことではないし、それが②の否定的な解釈につながる。さらに、①と②の反省に立って新たな問題提起として出されたのが、③の肯定的ないしより積極的解釈である。

そこで、本稿では、上記の傾向にもとづいて、日本におけるフィヒテ自然哲学研究の動向を紹介することとしたい。まず第一節においては、①の傾向を解きほぐすために、久保正夫「生命と思弁——フィヒテ研究より——」(『哲学研

究』第33号, 1918年)を検討する。というのも、この論考は、日本における最初期のフィヒテ研究であり、その後のフィヒテ自然哲学の軽視ないし無視の傾向と内容上連関しているとみなすことができるからである。つぎの第二節においては、フィヒテ自然哲学にたいする否定的な解釈を端的に示している論考を取り上げ、そうした否定的理解に共通している解釈上の枠組みを明らかにする。すなわち、自我による「非我」の支配という図式である。さいごの第三節において、フィヒテ自然哲学にたいする肯定的ないしより積極的な解釈を試みている論考を紹介し、その中で示唆されている可能性について検討することとしたい。

第一節 フィヒテ自然哲学にたいする無視ないしは軽視の傾向

日本におけるフィヒテ研究を概観するときすぐに目につくのは、フィヒテ自然哲学に関する研究が極端に少ないという点である。けれども、この傾向こそ、裏面において、フィヒテ自然哲学にたいして無視ないしは軽視するという一つの解釈を示す。それを端的に表しているのが上記久保論文にほかならない。

久保論文は、そのタイトル中に「生命」を掲げる。もとより生命概念は、自然哲学上もっとも根本的な概念の一つである。けれども、久保論文があつかう「生命」は、一貫して「思弁」において考察されているのであって、けっして自然哲学的観点からなのではない。久保論文がめざす課題は、フィヒテ哲学全体の検討をとおして「生命と思弁もしくは哲学との関係」(52ページ)を明らかにすることである。この「生命」は、「それ自らの認識を生みいだすところの“ein Lebendiges und Tätiges”」(53ページ)である。生動的なものとしての「生命」は、つまるところ「神の生命」(78ページ)にほかならない。知識学は、この「神の生命」の思弁的把握をめざす。

けれども、「生命」は、自然世界と直接関係することはない。自然世界は、われわれにおける「反省の形式的自由の図象」(76ページ)としてかろうじて問題にされるにすぎない。「世界はそれが自身にまったく無的なるかぎりなりあとう最悪の世界である」(同ページ)。だから、「自然哲学は知識の諸形式の体系において構成する現象性の学(Phänomenologie)以上もしくは以外にも独立する価値を持っていない」(75ページ)。

もとより、知識学の課題は、「自己を神の図式として実現し、認識することである」(80ページ)。そうした自己認識が可能であるためには、図式が完成しなくてはならない。そのかぎり、「知識の現実存在は自己の外に所与的図式を直観すべく要求する」(同ページ)。「これが知識に対して所与的に現はるる客観的存在、世界である」(同ページ)。——もはや明らかのように、「自然世界はフィヒテにとってはつねに精神の自発的行為の随伴的偶然的形式として独立的価値を否認され」(81ページ)る。

久保論文が「生命と思弁」というタイトルを掲げて探究した「生命」とは、はじめから「理念の中にある生命」(78ページ)にほかならない。この「神的生命の知識」(79ページ)こそ知識学の最高の概念なのである。それゆえ、「生命」をそういうものとして探究せんとする久保論文には、「独立的価値」をもちえない自然世界はフィヒテ研究の固有の研究対象になりえない、という一つの解釈が前提されているといわなくてはならない。そのかぎり、後のフィヒテ研究において自然哲学の研究が無視ないし軽視されるようになったことは決して偶然ではない。日本のフィヒテ研究のもっとも早い時期において、そうしたいわば暗黙の解釈を示している点で、久保論文は象徴的な論考なのである。

第二節 フィヒテ自然哲学にたいする否定的な解釈傾向 ——自我による「非我」の支配という図式

前節で検討した、フィヒテ自然哲学にたいする無視ないし軽視の傾向は、もう一步ふみこんで解釈されれば、容易に否定的な解釈に転化する。両者は同一線上に立つからである。本節では、こうした否定的解釈の典型として以下の三点の論考をとりあげる。

松山寿一「人類史と自然史——歴史と自然の概念をめぐるフィヒテ哲学とシェリング哲学の差異——」(『ドイツ自然哲学と近代科学』所収、北樹出版、1992年)

大橋良介「自然・自我・精神」(『絶対者のゆくえ』所収、ミネルヴァ書房、1993年)

菌田宗人「符牒としての自然——ドイツ観念論と初期ロマン派の詩人たち——」(『自然とその根源力』所収、叢書ドイツ観念論との対話2、ミネルヴァ書房、1993年)

これらの論考にはきわめて特徴的な共通点が認められる。それは、自我と「非我」という構図においてフィヒテの自然を捉えている点である。この点を以下吟味することとしたい。

(イ)

まず、松山論文は、シェリングの自然哲学と対比して、「フィヒテの自然概念の根本的性格」(143ページ)をはっきりと「自然否定の態度」(148ページ)として捉える。こうした「反自然の態度」は、フィヒテ自身の歴史哲学および宗教哲学との連関において指摘される。前者の歴史哲学との連関では、『学者の使命講義』におけるフィヒテのルソー批判がとりあげられる。すなわち、ルソーの自然状態を不自由で非理性的、かつ受動的な状態とみなして批判する態度のうちに、自然を「未熟で野蛮」なものとして捉える自然観が表出されているというわけである。その上で、松山論文は、フィヒテにとって自然が「非能動的、非活動的で、外的な動因が加わらなければ状態変化を起こさない存在」(144ページ)であることを指摘する。だから、フィヒテの自然は「自然の機械論」であり、「純粹理論的にいえば」、「非我」にほかならない、とされる。そして、フィヒテの自然観のもう一つの特徴として「自然支配の理念」(145ページ)をあげる。すなわち、フィヒテは、自然を「人間が道具的、技術的に手を加えることによって人間生活に役立てる素材」としてしかみていない、というわけである。こうした「自然支配」の観点は宗教哲学においても同様とされ、「道徳法則は自然に命ずるだけでなく、自然を支配しなければならない」という『啓示批判』の記述が引用される。だから、フィヒテにおいては、自我、意志こそ絶対的な創造原理であり、その自我の自由のために自然の合法則性が破棄される、ということとなる。

以上で確認できるように、松山論文は、フィヒテの自然観を、たんに自然哲学を否定するのみならず、自然の合法則性までも抹殺しようとする、そうした「自然否定の態度」として批判する。しかも、自然はどこまでも不自由で受動的なものであり、自我の支配に服さねばならないとする観点は、最初期から晩年のフィヒテにいたるまで貫かれていることが強調される(148ページ)。松山論文は、自我・自由・理性と「非我」・自然・非理性との構図のもとに、フィヒテの自然観を捉える。

つぎの藪田論文も松山論文と同じ観点に立つ。もとより、藪田論文は、そのタイトルにある「符牒としての自然」、つまり「自然は、その全体がある一つ

の意味を封じ込めた符牒であり、また象形文字である」という観念を初期ロマン派の詩人たちとの連関で解き明かそうとするものであって、フィヒテの自然哲学を主題とするものではない。けれども、藪田論文が「非我」を端的に自然として捉えている点は、フィヒテの自然観の典型的な解釈を表している、ということが出来る。この点は、ノヴァーリスの「大我としての自然」と対比して、フィヒテの自然を「非我としての自然」と特徴づけるとき端的に表出される。この点を確認しておこう。

藪田論文によれば、「フィヒテの哲学は、カントが放棄せざるをえなかった理性の自律性を再び回復しようとするところに始まっていた」(232ページ)とされる。すなわち、カントの人間悟性は自然に法則を付与するものであるにもかかわらず、その人間悟性は自然そのもの、つまり物自体をけっして認識することができない。悟性的認識は、認識しえない物自体によって触発される感性にもとづく。「そうであれば、人間の認識行為全体は、悟性自身がまさに認識しえない当のものによって担われているということになる」(同ページ)。そこで、カントにとっては感性による経験をとおしてのみ可能となる理性活動全体を、理性そのものから、理性の内的必然性にしがたって根拠づけること、それがフィヒテ自身の課題となる。「理性活動を所与的なものとしてでなく、自律的なものとして定立すること、そして自然を、感性に働きかけてくるもの、つまり経験されるものとしてでなく、逆に主観の側から定立されるものとして説明することが、フィヒテの出発点となる」(233ページ)。かくして、自己自身を定立する自我は、みずからの活動によって、「『非我』、つまり世界」をもそういうものとして定立し、対象化することとなる。それによって、自我は、「『非我』、つまり世界」との関係の中に限定されるとしても、さらにこの関係をも超えていく「より高次の自我」へと高揚する。そうして絶対的自我へと無限に純化されていく。この純化の過程において、自然は、「廃棄されねばならないもの」(同ページ)となる。「自我と世界、精神と自然という対立の中で、フィヒテは自我の絶対的自律性を確立せんがために、他面では、いわば自然を切り捨てねばならなかったのである」(同ページ)。

以上で確認できるように、藪田論文は、「自我と世界、精神と自然という対立の中で」「非我」を自然とみなし、その自然を廃棄されるべきもの、切り捨てられるべきものと捉える。

(ロ)

さて、フィヒテの自然観に対するこうした解釈に、いわばフィヒテ自身のお墨付きを与えているのが大橋論文である。大橋論文は、フィヒテ自身が施した「目立たない、しかし注目すべき一つの訂正」(73ページ)を指摘する。それは、「知識学の概念について」における訂正である。この知識学への予備的入門書は、イエナ大学の聴講生のために記されたものである。初版は1794年、第二版が1798年である。その第二版ではつぎのように訂正されている。

「自然はその存在と諸規定とにおいてわれわれから独立したものとみなされねばならず、諸法則にもとづいて観察されるべきでありまたそうでなくてはならないが、そうした自然と諸法則は知識学によって必然的なものとして与えられているのである。」

すなわち、初版では「非我」となっていた下線部の箇所が、第二版では「自然」と訂正されたのである。この「まったく目立たない訂正」を、大橋論文は重くみる。というのも、その背景に、自我—「非我」関係をとるフィヒテと自我—「自然」関係をとるシェリングとの「重大な対立」(74ページ)がひそんでいるとみなすからである。大橋論文は、フィヒテのこの訂正の裏にシェリング自然哲学の影をみる。

大橋論文によれば、この時期のシェリングの論考「自然哲学のための諸構想」(1797年)、および「世界霊について——高次の自然学の仮定」(1798年)には、「自然哲学」の構築に向けられた思想が認められるという。1798年はシェリングがイエナ大学に赴任した年でもある。その同僚たるシェリングが「自我と等根源的な自然」(75ページ)を「自然哲学」において構想していることは、「一切を定立する唯一の根源活動」である「フィヒテの知識学を根底で揺るが」(同ページ)すものとならざるをえない。そのかぎり、フィヒテも見過ごすことができなくなる、というわけである。

この局面においては、「非我」をとるか「自然」をとるかということは瑣末的な問題ではなく、両思想の根幹にかかわる大問題となる。自我にたいして反立されたものとしての「非我」と、自我をも含む「自然」とでは雲泥の差となる。大橋論文は「庭前の梅樹」を例にとる。もし、庭前の梅樹が「非我」であるならば、それは自我の法則性に基礎づけられるもの、自我によってはじめてその実在性が認められるものとなる。その場合の「非我」は「『死んだ』自然」でしかない。これにたいし、庭前の梅樹を「自然」とみなすならば、それは

「可視的な精神」としての「生きた自然」となり、「梅樹と自我とは同一生命の二方向のあらわれ」（同ページ）となる。

こうした「重大な対立」がその背景に控えているときにフィヒテがあえて施した、「非我」から「自然」への書き換えは、シェリングの自然哲学へのフィヒテの歩み寄りを意味しているわけではない。むしろ逆である。大橋論文によれば、フィヒテは「自分のいう『非我』こそがまさしく『自然』の意味であり、シェリングの自然哲学は自分の知識学に吸収されるべきだという意味」（同ページ）をそこに込めている、ということとなる。

以上のように、大橋論文は、フィヒテが行った書き換えの背景にシェリングの自然哲学の構想があることを強調する。けれども、この時期のフィヒテの作品を振り返ってみると、いくつかの疑問が浮上してくる。たとえば、「非我」を「自然」と言い換える事例をフィヒテはすでに1794年の『学者の使命講義』の第三講において示している。すなわち、「経験の根拠である独立した非我、すなわち自然は多様である」（*Fichtes Werke VI*, hrsg. v. I. H. Fichte, S. 313）。このように、フィヒテが1794年においてすでに「非我」を「自然」と言い換えていたということは、「非我」と「自然」の関係の問題がフィヒテ自身の固有の問題としてすでに内在していたことを示している。そのかぎり、1798年においてようやく意識化されたわけではない。（むしろ、だからといって、1798年におけるフィヒテとシェリングのあいだの「重大な対立」までもが否定されるわけではない。）この点の確認は、さらに、つぎのような注意を促す。すなわち、「非我」を「自然」と言い換えることが、そのまま「自然」を「非我」に解消することを意味しているわけではない、という点である。（というのも、フィヒテにおいては、「非我」は「自然」のみならず「他我」をも意味するからである。いうまでもなく、フィヒテにおける「他我」の問題は、「相互承認」を可能とする根源的制約をなす。その点で、「他我」を含む「非我」は単純に「死せるもの」とはいえない。）この点の確認は、さいごに、自我と「非我」という閉塞化された図式においてのみ「自然」を捉える観点に対する再考を促す。

第三節 フィヒテ自然哲学にたいする肯定的ないしは積極的な解釈 ——構想力、「絶対者の像」をめぐる

前節までの論考では、フィヒテの「自然」が「死せる自然」であることが強調されていた。すなわち、合法性を否定するもの、受動的なもの、したがって固有の意義をもたないものであった。そして、その観点の基礎には自我による「非我」の支配という図式があった。こうした観点にたいして、本節では、フィヒテ自然哲学を積極的に解釈している論考として、以下の六点をとりあげる。

木村 博「フィヒテとシェリングにおける自然構想について」(『自然哲学研究』2, 1990年——以下, 木村論文Aと表記)

藤澤賢一郎「フィヒテの身体論」(『東京経学会誌』170, 1991年)

長島 隆「フィヒテとシェリング——「生きている自然」と思惟(知)と存在の同一性——」(『自然とその根源力』所収, 叢書ドイツ観念論との対話 2, ミネルヴァ書房, 1993年)

木村 博「フィヒテ自然哲学の基底——構想力の揺動——」(『ドイツ観念論と自然哲学』所収, 創風社, 1994年——以下, 木村論文Bと表記)

木村 博「動物磁気療法に向けられたフィヒテのまなざし——自然と絶対者——」(『国際教育研究』第17号, 雄文社, 1997年——以下, 木村論文Cと表記)

木村 博「自然の可視性——後期フィヒテ自然哲学の本領——」(『一橋論叢』第119巻2号, 日本評論社, 1998年——以下, 木村論文Dと表記)

以上の論考が提示している論点は、つぎの三点にしばられる。すなわち、まず第一に、(イ) フィヒテに固有の自然観が「死せる自然」に解消されるのではなく、有機的自然観ないしは「力の自然観」だということがあげられる(木村論文A, B, 長島論文, 藤澤論文)。第二点は、(ロ) 自我による「非我」の支配という図式の相対化を遂行するのが「構想力」だということである(木村論文B)。さいごに、(ハ) 絶対者の「像」(木村論文C), および「現象」(木村論文D)として展開されている後期フィヒテにおける自然哲学の意義が詳論

される。

(イー1)

通常の理解にしたがえば、フィヒテ－シェリング関係の論理的焦点は、「超越論哲学」と「自然哲学」との対立のうちにある。けれども、木村論文Aおよび長島論文は、両者のあいだにある隠れた対立点として「自然構想をめぐる差異」(木村論文A, 43ページ)を指摘する。そのうえで、フィヒテの自然観を「有機的自然観を呈示」(長島論文, 77ページ)するものと捉える。この点は、すでに、これまでの論考にみられたような、自然の合法則性を否定するものとして解釈する観点とは区別される。

けれども、長島論文においては、フィヒテの自然観が両手をあげて評価されているわけではない。シェリングの自然哲学に比すれば、「フィヒテの自然哲学の『不毛』は決定的」(78ページ)とみるからである。この点をふまえたうえで、とりわけ、長島論文は、フィヒテとシェリングの自然哲学が「端的に分岐する点を、『質』の概念の基礎づけの問題に見」(78ページ)る。そこで、長島論文に即して、「自我と実在性との関係」(79ページ)をまず確認しておこう。

長島論文によれば、フィヒテにとって自然の可能性は、「非我という理論的には存在資格として無でしかないものに実在性を与え、実在性を自分の外部に構成する過程として展開せんとすること」(83ページ)において開かれる。たしかに、「非我」は自我の理論的能力にとっては自我にたいして存在し、そのかぎりでのみ存在する。だから、独立した存在をもっていない。しかし、「自我が自らを『努力』として、つまり、実践能力として定立する場面で、非我は独立した存在を獲得する」(同ページ)。非我という対象の規定性、すなわち「質」は、自我の能動性である。したがって、「自我の能動性を委譲された、それ自身において能動的な運動を行う」(85ページ)対象そのものは、もはや「死んだ客体」なのではない。この「自然の構成」は、一般的に存在しない、あるいは発出論のごとく自然を生みだすのではない。あくまでも、存在資格として自我にとって無であるということなのであって、神が自然を創造するというイメージで捉えられるべきものではない。それゆえ、フィヒテの自然論は、人間の自由のシステムと自然のシステムとを繋結したところに成立するのであり、「自然の存在様式はその意味で自我の存在様式を表現するものなのである」(86ページ)。こうした「自己定立行為」＝「対象定立行為」によって、はじめ

て、「対象は対象として確立し、主観もまた主観として確立する」(同ページ)。

以上で示されているように、長島論文は、フィヒテが自然と自我の構成の同一性を明らめに出した点にフィヒテ自然哲学の要点をみる。そのかぎりにおいて、「フィヒテはシェリング自然哲学の文字どおりの先駆者であった」(81ページ)のである。(ただし、長島論文では、フィヒテの自然が自我の「前史」とはならず、その点で、シェリングの自然哲学とは決定的に異なることが強調される。)

(イー2)

フィヒテの自然観は「力の自然観」である。この点を藤澤論文と木村論文Bが強調する。まず、藤澤論文は、「フィヒテの身体論」に着目し、身体の問題についてのフィヒテの議論をつぶさに調べ上げることとおして、「フィヒテ哲学のこれまでほとんど注目されてこなかった側面」(161ページ)を解き明かそうとするものである。その結論は、「力としての身体が感性界と叡知界を架橋する」(184ページ)点に求められる。藤澤論文は、フィヒテの身体論がフィヒテ自身の自然論に直結することを強調する。というのも、法論や道徳論などの「応用知識学」においては、「本来的知識学」とは違って、「身体をそなえ、感覚界ないし叡知界で実働する個別的な経験的人格」(161ページ)が出发点となるからである。その場面では、「人格の身体性の確立が不可欠であり、それゆえまた自然論にも立ち入らざるを得ない」(同ページ)。そこで、フィヒテの「力の自然観」を概観してみよう。

「自然の諸現象の根拠は力である」(167ページ)——これがフィヒテの力の自然観のいわば基本テーゼとなる。それにしたがえば、総じて物の存在や性質は一定の生成の結果である。物がそのように規定されて存在するということは、そのことを説明するような根拠を含む活動、つまり力を必要とする。「これによって、物質から自然としての人間に至るまで、あらゆる自然現象は力の発現として考えられるようになる」(同ページ)。いっさいのものを唯一の自然とみなすならば、そこには唯一の力があるだけである。こうした、「唯一なる普遍的自然」の力は、粗なる物質とその運動・鉱物・植物・動物・人間をその産物として生みだし、貫く。自然の頂点に立つのはこうした至上なる力である(参照、167～8ページ)。

以上のような「力の自然観」は、木村論文Bにおいても詳述されているので、これを援用しておこう。木村論文Bでは、フィヒテの自然体系が「普遍的

「自然力」の発現の体系であることが強調される（参照、73ページ）。この自然力は、対象に固有で、その本質をなす内的力である。フィヒテの自然体系は「有機体制」を重視する。「機械制」にたいするフィヒテの見解はきわめて消極的である。機械制にあるのは、物質の永続的衝突と圧迫、牽引と反撥という「たんなる連鎖」でしかない。一連の系列において、各項は自らの力を最初の項から受け取り、そしてその力を第三者に伝播する、そうした無際限な作用以外のなにもものでもない。その点で、機械制は直線的でしかない。これにたいして、有機体制は、「自己内還帰構造をもった相互作用」（参照、74ページ）を本質とする。いっさいのものは内的に貫通しあい、相互に解消しあい、新しい全体に融合する。新しい全体に融合したものは、単独のaでもb、c……でもなく、いっさいの合一の成果にはかならない（参照、75ページ）。いっさいの有機的自然産物は自然運動の力の実現なのである。有機体制は、「自然におけるより高次のポテンツ」である。

かくして、フィヒテは、自然の根本力を五つの根本諸概念として提示する。自然は、自然そのものの中では、運動の自立的で最終的な根拠である。まず、第一の自然力は「万有引力」である。これはもっとも単純な物質とその運動の根拠である。静止しているものも万有引力によってみずからの位置を維持するのであり、運動するものも同一の自然力によって運動する。だから、運動は「引力の生成の像」にかなならない。第二の自然力は、「化学的根拠力」である。この根本力は、物質一般の統一の根拠として、たんに同一の質だけでなく、相異なる質をも有機的統一へと総合する根拠でもある。この化学的自然力の産物が鉱物にかなならない。第三に、化学的根拠力は「成長」を引き起こす力となる。この力は成長という固有の力として貫徹し、その産物が植物である。第四に、自然力は万有引力から身をもぎ離して自由運動を可能にするような「絶対的な運動力」となる。その力の産物は動物である。動物は空間中を移動する運動力をもつ。第五に、絶対的単純性から多様なものの統一の有機現象が生じ、そうした自然力の全概念の総括が「意欲」である。自然力は、人間において、絶対的運動の完成として結実する（参照、78～9ページ）。

以上のように、フィヒテは、唯一の絶対的原理として現象する「力の自然観」を提示する。

(ロ)

フィヒテの自然が「死せる自然」ではないことが明らかになったとしても、

フィヒテの自然観を否定的に捉える場合の枠組みである自我による「非我」の支配という構図は残る。そこで、この固定的構図そのものが相対化されるべきことを、木村論文Bは強調する。そして、その構えを相対化する可能性を「構想力」にみる。

木村論文Bは、フィヒテの遺稿『動物の本質解明のための諸命題』を重視する。その中でもとくに、「わたしは、自然そのものを破棄する (vernichten) こと、つまり自然を知性 (自己自身を定立する自我) にしてしまうことなしに、知識学にしたがって自然にわたし自身の概念を可能なかぎり移し入れる (übertragen)」という記述の意味を解きほぐすことが決定的とみる。その際のポイントは、〈移し入れ〉である。木村論文Bは、知識学にもとづきながらも、自然そのものを破棄することのない、そうした〈移し入れ〉の可能性を「構想力の揺動」のうちに探る (参照, 68ページ)。

フィヒテにとって自然とは、自我の活動から遮断されたところですがすでに前提されているような独断的自然ではない。言い換えれば、まず無垢なる自然客観が現存し、つぎにそれについての知として自然哲学がもくろまれているわけではない。そのようなたんなる自然客観の知ではなく、その知の知を遂行することによる自然客観の根拠づけが課題となる。「われわれが客観についてたんに知るだけで、この知を再び知ることがなければ、超越論的観念論はまったく不可能であろう」というフィヒテのことばこそ、フィヒテ本来の意味での「自然哲学の立場」を物語る (参照, 69ページ)。

構想力は、所与の対立者のあいだをとりむすぶ固定的中間者なのではない。むしろ、絶対的に反立したものをその反立という動性において統合する、そうした根源的動態である。不断の対立から統一を引き出し、「矛盾するものを合一する」構想力の本質は、一方でもって他方を裁断したり、固定的限界を定立することにあるのではなく、互いに反立しあうもののあいだを間断なく往還する、そうした「揺動」そのもののうちにある (参照, 81ページ)。

それゆえ、構想力は、いかなる「固定的立脚点」をも有しない。「矛盾するものを合一する」とは、固定した限界定立によって反立関係に終止符を打つことではない。かといって、構想力の揺動は、相反立するもののあいだの不徹底な妥協策なのでもない。構想力に固有な活動としての揺動は、相反立するもののあいだをどこまでも非妥協的に往還する。こうした不断の揺動をとおして、反立しあうものの根源的な総合を果たす (参照, 84ページ)。この総合は、構

想力の所産である。反立しあう両項は構想力の揺動によってはじめて「保持」されうる。そのかぎり、構想力の揺動は、反立しあう両契機の事後的第三者なのではなく、両契機そのものの現在化の根源的条件にはかならない（参照、85ページ）。

そもそも、こうした根源的なはたらきを担う構想力との出会いは、「自我に内在しかつ自我のみでは克服しえない矛盾」（81ページ）への洞察にもとづく。その点で、構想力は、自我と「非我」という反立しあう両項のうちの一方を他方に解消したり、一方に能動的なものないし主観的なものを、他方に受動的なものないし客観的なものを独断的に前提するものではない。構想力にとって焦点となるのは、「相互に廃棄しあわなくてはならない契機間に入り、それによって両契機を保持する」こと、なのである（参照、83ページ）。

木村論文Bは、以上のように〈移し入れ〉を解する。「単に理論的領野のみならず、実践的領野においても貫徹されている」（85ページ）構想力は、自我—「非我」関係をその根底において根拠づける。そのかぎり、自我による「非我」の支配という閉塞的図式にもはやとどまることはできない、と捉える。

（ハ—1）

従来フィヒテ自然哲学にかかわる研究においては、後期フィヒテの思想が十分考慮されてこなかった。（前出松山論文で後期フィヒテの思想が言及されているが、しかし、「自然否定」という点では最初期から一貫したものと解されてしまう。また、前出藤澤論文でも、たしかに後期フィヒテの作品が視野におさめられてはいるが、断片的記述にとどまる。）その中でもっとも重要な作品である『動物磁気療法に関する日誌』がほとんど看過されてきた。この点を木村論文Cは問題とする。そして、この作品が「絶対者の像」という後期フィヒテの最大の理論的特徴にとづいて、自然哲学を構想している点を重くみる。像の理論はいつそう根源的な洞察を可能にする。

この作品の中では、自我と自然との関係が絶対者の視野のもとに捉えられる。もっとも、その場合、自我が直接絶対者を捉える、というわけではない。というのも、自我を端的に超えている絶対者を直接捉えようとするのは、それによって、かえって絶対者を捉え損ねてしまうことになるからである。だから、そうした自我の認識は否定される。だが、絶対者への洞察をそういうものとして自我の中に惹起するものこそほかならぬ絶対者なのである。では、いかにしてそうした洞察を生み出すのか。それをフィヒテは像の理論によって説明

する。

木村論文Cによれば、フィヒテは自然の体系を「没形態性からの形成・形態化」の過程として捉える。そして、そのように「力動的に形成する力」を同時に「精神的力」(神的原理)として「像の原理」のもとで捉える(参照, 29ページ)。すなわち、人間と自然をとおして力動的に作用する形成力(*Bildungskraft*)こそ「内的無限性の客観的な形像作用(*Bilden*)」にはほかならない。この形像作用によって、把握可能な形態としての「像(*Bild*)」が形成される。「像として形態化されることにおいてわれわれの限界のうちに立ち現れてくる」(30ページ)。

像とはまさに「そこ(*da*)」にあることを示す。むろん、像は「映し」なのであって、映す当のものではない。けれども、感性的なものの領域とのかかわりなくしては、絶対者がいかに「自己現出作用(*Sicherscheinen*)」であろうとも、そういうものとして自我によって解されることはありえない。「自然における内的生命についての説明しがたい概念」は、そういうものとして把握可能となる(参照, 同ページ)。そのかぎりにおいて、像は絶対者と自我を媒介する。

「神の像である実在性においては、抵抗は自由と解きたい総合においてまったく合一されている」——自然は、自我における「神的本質の自己還帰」にとって不可欠な環である。すなわち、絶対者の像として、自然は、法則と自由の合一の〈場(*Ort*)〉にはほかならない(参照, 31ページ)。

木村論文Cは、以上のように、後期フィヒテの自然哲学が自我による「非我」の支配という閉塞的な図式を端的に超えたところで構想されていることを強調する。

(ハ—2)

さて、自然を絶対者の像として捉えることは、同時に絶対者の現象として捉える視点へとつながる。いずれも、自然の可視性をめぐる問題であるからである。さらにいえば、自然の可能性の問題は、自然を自然自身の規定に即して捉える可能性の問題でもある。

以上の視点から、木村論文Dは、自然を像として、現象として捉えることが、絶対者の像としての知との根源的な関係を照らし出すことになる点を強調する。そして、その解明のために、『超越論的論理学』および『1812年 知識学』の中で展開されている「現象」に着目する(参照, 1ページ)。

絶対者、神の本来性は自体的には不可視的である。けれども、この不可視性は、現実の事的世界において可視的となる。この過程を解きほぐす鍵として、木村論文Dは、「現象はみずからに現れる (Die Erscheinung erscheint sich)」という「図式」に着目する。(これは「現象はみずからに対して (für sich) ある」と同義である。)このような現象の対自構造の解明は、自然の対自構造の洞察にとって重要な意義を担うこととなる(参照, 6ページ)。

『1812年 知識学』において、現象の二重化(最終的には現象の五重性)が「図式論」として詳細に分析される。すなわち、「現象は現れる」という「図式Ⅰ」においては端的な同一性が示されているのにたいし、「現象はみずからに現れる」という「図式Ⅱ」では、「みずからにたいする現象の関係 (Beziehung der Erscheinung zu sich)」が分析される。このように「現象がみずからに現れる」という形式においては、「或るもの、すなわち現象自身がそれに (der) あらわれること。そして、それが (die) 一なるもの、すなわちまさに自己自身に現れること」(Fichtes Werke X, hrsg. v. I. H. Fichte, S.348)という二つのもの(現象自身と自己自身)が、しかも不可分の連関において示される。現象の現れは、「みずからに現れるはたらき (ein sich Erscheinen)」である。みずからに現れるという、同一のはたらきによって、現象自身と自己自身という不可分の二重性が惹起される。この二重性が「主観—客観形式 (die subjekt-objektive Form)」にほかならない(参照, 8~9ページ)。この二重性は、さらに、「二重の二重化」を遂行し、この四重化を統合統一するのが「図式Ⅲ」において示される「として (als)」の機能である。「として」は、現象を五重化において統合する「本来的な総合的合一点」である(参照, 9ページ)。

いまみた現象の自己現象とは、いうまでもなく、「自我形式」ないし「自我性」である。ここで、木村論文Dは、「現象はみずからに現れる」という図式のもつ重要な意義を指摘する。すなわち、この図式は、①現象を自体として捉えるのではなく、その本来性において、いかえれば超越論的根拠において捉えること、②そうした把握そのものが、たんに受動的に成立するのではなく、「みずからに現れる」という根源的なはたらきをにやう自我性(むろんこれは端的な「主観—客観性」である)によってはじめて可能となること、を明示しているのである。

現象の五重性の把握は、さきにふれた(イ-2)「力の自然観」にもとづく

自然の体系の五つの根本概念に通底する。この自然の五つの根本概念は、自然の不可視性を可視的にする「自我像」である。この脈絡において、自然は原像となり、その自然知としての五つの概念は像の像となる。むしろ、知識学は、超越論的観念論として、自然を絶対者とするのではなく、その超越論的根拠を求める。この超越論的根拠からみれば、自然は絶対者の像となる。ただし、不可視なものを可視的なものにする「われわれの像」によって媒介されることをとおして、はじめて、自然は絶対者の像として立ち現れてくるのである。

それゆえ、もう一度いえば、自然とは、自我がその精神的本質を發揮しうる「場」であるだけでなく、神的本質が現象の世界に顕現することさえ可能とする「場」である。

自然を絶対者の像として捉えることは、絶対者の像である自我と根源的な新しい関係をきり拓く、そうした可能性を示しているのである。(参照, 13ページ)

以上で確認できるように、フィヒテの自然哲学は、けっして自我による「非我」の支配という図式に矮小化されるものではない。絶対者との関連で捉えられた自然は、自我の固有な相関者として現れているのである。

おわりに

フィヒテが授業計画の中に「自然哲学」を予定として立てていた点 (*J.G.Fichte Briefwechsel*, hrsg.v. Hans Schulz, Bd. II, S.582) は、けっして空文句だったのではない。たしかに、いわば大文字の自然哲学は残さなかったとしても、その構想の内実は、これまでみてきたように、絶対者の像および現象という後期フィヒテ知識学の根幹にかかわるレベルで考究されていたのである。そのかぎり、フィヒテ自然哲学は、無視ないし軽視されるべきものではなく、むしろ、その批判も含めていっそう活発な議論を呼び込む豊かな土壌をなしているといわなくてはならない。——こうした可能性を、「日本におけるフィヒテ自然哲学の研究」の動向が示しているのである。